

平成29年度 鳥栖市立麓小学校 学校評価結果

1 学校教育目標 「ふるさとを誇りに思い、やさしく・かしこく・たくましく生きる麓っ子の育成」 ※鳥栖西中校区の教育目標 小中9年間を通して豊かな人間性と自立心を培い、生きる力をもった児童生徒を育成する	2 本年度の重点目標 ◎子どもの「学び」を鍛える・学力向上 ・国語科授業による言語力と豊かな日本語の獲得。 ・電子黒板とデジタル教科書の効果的な活用。 ◎子どもの「心」を鍛える ・鳥栖西スタイル「三訓」「あいさつ」「時間」「清掃」を大切に指導を行う。 ○子どもの「体」を鍛える ○教師力向上・地域連携
--	--

達成度 A：ほぼ達成できた
B：概ね達成できた
C：やや不十分である
D：不十分である

3 目標・評価

①子どもの「学び」を鍛える。

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●学力の向上	学習規律の定着	・「学習のめあて」の内容を検討し、学習への取組への指針とする。 ・「チャイム着席」「はいの返事」などを90%超にし、習慣化する。	・「休み時間に次時の準備する」「話を聞く」「家庭学習を確実にやる」を3本柱として指導していく。 ・「麓っ子ががんばり週間」を設定し、「ふもとっ子ががんばり表」で自分の学びを振り返らせる。	A	・「はいの返事」「学習準備」や「家庭学習」については、90%を超え、習慣化してきた。 ・「麓っ子ががんばり週間」に自己評価をし、振り返りをさせることで、回を重ねることに学習規律が定着してきた。	・「麓っ子ががんばり週間」を引き続き設定し、さらに意識を高め、習慣化を図る。
		基礎・基本の定着	・スキルタイムの充実を図る。 ・家庭学習の手引きを活用し、家庭学習の定着を図る。 ・学力向上を意識した学習を仕組む。 ・読書量1人平均年間80冊以上を目指す。	・ことばスキル、計算チャレンジ、すくすくタイムを通して既習内容の定着を図る。 ・家庭学習の手引きを全校児童に配布し、保護者に協力を呼びかける。 ・本時のめあて、まとめを意識した授業を行う。ことばや式を使って自分の考えを表現させる。	A	・ことばスキル、計算チャレンジ、すくすくテストを通して既習内容の定着を図ることができた。 ・家庭学習の手引きを全校児童に配布し、保護者に協力を呼びかけた。 ・本時のめあて、まとめを意識した授業を行った。言葉や式を使って自分の考えを表現させるようにしたので、表現力も伸びてきている。 ・読書量一人平均80冊以上を達成した。	・学習内容の確実な定着を目指し、基礎・基本を繰り返し指導していく。 ・より見やすく、活用しやすい家庭学習の手引きを作成し、配布する。
	◎教育の質の向上に向けたICT活用教育の実施	教員のICT活用能力の向上	・ICTを活用した授業に取り組む。 ・電子黒板の機能について研修し、授業に生かせるようにする。	・全教員がデジタル教科書やデジタルビデオカメラを活用した授業に取り組む。 ・校内研修会を夏季休業中に実施する。 ・電子黒板導入後、授業導入や考えの練り合い等で積極的に取り組む。	B	・デジタル教科書や実物投影機を積極的に活用し、児童の学習に役立てることができた。 ・導入時に、具体例を提示したり、考えの交流時に児童のノートやワークシートを提示したりするなど効果的であった。 ・日本語タイムへ向けてのICT活用の校内研修会を実施した。	・電子黒板をさらに活用するために、据え置き型のパソコンの設置が望ましい。 ・デジタル教科書をさらに活用していくために、国語・理科のデジタル教科書の起動時間・読み込み時間の短縮が必要である。 ・講師招聘し、職員のICT活用能力が向上するような研修を開催できるよう努める。

②子どもの「心」を鍛える

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●心の教育	・あいさつ、返事・無言掃除の徹底	・「児童生徒は、あいさつ、返事、無言掃除がきちんとできている」と回答する保護者を70%以上、教職員・児童生徒を80%以上にする。	・「あいさつ、返事、無言掃除」についての指導を、年度初めに全校集会、学級指導を通し徹底する。また、年間を通して全校集会等の際に「あいさつ、返事、無言掃除」についてふれ、意識の継続を促す。	B	・あいさつについては、地域の方からお褒めの言葉をいただけるようになってきた。返事については、人任せにしてしまう児童がまだまだ多い。掃除は、下級生から上級生まで丁寧な掃除ができています。 ・アンケートの結果、保護者は平均83%であり、児童・教師ともに目標を達成できた。	・あいさつの声はよく出ているので、相手の目を見ながら気持ちのよいあいさつができるように指導していきたい。返事については、学校全体で意識の向上を図っていききたい。
		・道徳の時間、人権・同和教育の充実	・「いじめ・命の日」の取り組みとして、人権週間に全学年生命尊重の授業を行う。 ・年間に1回以上、全ての学級で保護者や地域の方が参観することが可能な「ふれあい道徳」の授業を行う。	・「私たちの道徳」を活用できるよう、道徳、人権・同和の年間計画を作成を見直し、児童の実態に応じた指導をする。	B	・保護者や地域の方々から参観できる道徳の授業を全学級で実施することができた。授業を通して学校で指導したことを理解してもらうことができた。 ・人権週間には、人権についての話を全校児童にすることで、意識を高めることができた。 ・また、人権標語に取り組むことで、友だちに優しく思いやりの気持ちをもって接することの大切さを考えさせた。 ・人権同和実践集の活用が十分にできなかった。	・人権同和実践集の中の取り組みを紹介したり、資料を作って活用したり、実践しやすい環境作りを努めていく。
	・人や自然とふれあう体験活動	・麓地区の自然と人のよさについて学び、ふるさとのよさを意識する児童生徒の割合を90%以上にする。	・「総合的な学習の時間」等を活用し、学校と地域連携コーディネーターとの連携を図り、自然体験実施計画に沿って、農業体験を行う。 ・麓ふれあい祭りで、地域の方々と共に昔遊びなどの体験活動を行う。	A	・体験活動や地域の方々とのふれあいながら学習したことを楽しむことができた児童は97%であった。 ・人や自然とのふれあいを深める活動(栽培活動・田植え稲刈り・焼き物作り・麓ふれあい祭り)などを地域の方に協力してもらい、体験できた。	・地域の方と連携して学校全体で共通理解しながら進めていく必要がある。	
	●いじめの問題への対応	・早期発見、早期対応体制の充実 ・いじめと命を考える日の取り組みの充実	・いじめ防止対策委員会を年2回開催する。 ・毎月10日「いじめと命を考える日」に児童対象のアンケートを実施し、児童の状況や気持ちを把握し、すぐに対応する。 ・得た情報にすぐに対応し、全クラスがアンケート用紙を職員室に保管して、児童の変容をつかむ。	B	・毎月10日「いじめと命を考える日」に児童対象のアンケートを実施し、児童の状況や気持ちを把握し、すぐに対応を行った。全クラスのアンケート用紙を職員室に保管して、児童の変容をつかんでいった。 ・まだ心ない言葉をかけたり、態度をとったりする児童がいるので、指導を継続していく。	・アンケートの実施と共に、日ごろの児童観察により、児童の変容に気を配っていく。 ・いじめ問題を未然に防止するために、グループエンカウンターなどを取り入れた居心地のよい学級づくりに取り組んでいく。	

③子どもの「体」を鍛える。

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●健康・体づくり	・よりよい生活習慣の定着	・給食後の歯磨き実施率を100%にする。 ・目標就寝時刻を守る子どもを70%以上にする。 ・毎月1日の「ノーテレビデー、ノーゲームデー」の取組率80%以上にする。	・「ふもとっ子ががんばり表」を活用し継続的な指導を行う。 ・学期ごとにノーテレビデー、ノーゲームデーを実施する。 ・家庭での取組をまちcomiで知らせ、各家庭への啓発を強化する。	B	・給食後の歯磨きについては、担任の指導やチェック表の活用などによって概ねできていた。 ・就寝時刻については、目標を達成できた。 ・ノーテレビ・ノーゲームデーの実施率については、目標を達成できた。	・引き続きがんばり表を活用し、継続的な指導を行う。 ・保健や学活の授業を計画的に行い、歯磨きや睡眠の重要性を引き続き指導する。 ・引き続き、前日の担任の話や活動の意義を話すことで、ノーテレビ・ノーゲームデーの周知徹底を図る。
		・体力の向上	・天気が良い日は95%以上の子どもが1日1回は休み時間、外で遊ぶようにする。 ・スマイルタイムを毎月1回以上の実施する。	・学級で全員一緒に遊ぶ日を設定したり(週1回程度)昼休みや業間休みには、外遊びの声かけをしたりする。 ・スマイルタイムを通して、運動の楽しさを味わわせたり、遊びの幅を広げたりする。 ・学校からの各種便りや、新体力テストの結果を知らせることで、保護者・地域への啓発を行う。(学校だより、給食・食育だより、保健だより、学級通信など)	B	・各学級の係活動を中心として、外遊びの日を設定することができた。多くの児童が外遊びを楽しんでいた。 ・スマイルタイムを実施することで、様々な遊びに取り組むことができ、児童の遊びの幅は広がったが、月1回以上の実施はできなかった。 ・各種お便りによる啓発活動は、徐々に効果を現しつつある。	・児童が行う係活動の声かけだけでなく、担任からの声かけや、担任と一緒に遊ぶ・もしくは見守る日を増やしていきたい。 ・新体力テストの結果を児童と確認し、体力向上のためには外遊びが重要であることを認識させる。 ・月1回以上のスマイルタイムを継続する。 ・引き続き各種お便りによる啓発活動を行う。

④教師力を磨く

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	○危機管理体制	・危機管理意識の高揚	・危機管理マニュアルの共通理解を図り、危機的事象発生時の役割を職員の100%が理解し児童生徒の安全確保を確実に行う。 ・校内外の危険箇所を知らせ、児童生徒の安全に関する意識を高める。	・危機管理マニュアルの内容を全職員で確認し、あらゆる危機の場面でも、児童の安全を確保できる行動が取れるようにする。 ・危機を想定した避難対応訓練を計画的に実施する。(火災、不審者、地震) ・施設設備の定期的な安全点検を行い、危険を伴う場合は迅速に対応する。	A	・危機管理マニュアルを実態に応じて変更し、その内容を共通理解するための会議を開くことができた。 ・学校評価アンケートにおいて、「子どもを守る校内体制ができていないか。」の問いに、97.7%の保護者が「できている、だいたいできている」と答えていることから学校の安全確保のための実践が効果的であったと言える。 ・避難対応訓練を計画どおりに実施することができた。 ・月1回の安全点検を漏れなく行い、危険箇所迅速に対応(修理、交換等)することができた。	・危機管理マニュアルは詳しく書かれているため、携帯版も作成し、危機管理に対しての対応を徹底する。 ・必要に応じて、短時間でも危機管理の研修会や注意喚起をする。そのことで、教職員の危機管理意識を高く持ち続けられるように取り組む。 ・毎週の職員連絡会の折、子ども達の気になる事例を出し合っているが、それらの事例から予測して予防策に先取りして取り組むようにする。
	○特別支援教育の充実	・個に応じた支援体制の確立	・特別支援教育コーディネーターを中心に、生徒指導担当者と教育相談担当者、関係機関と連携を図り、幅広く支援活動を行い、職員が特別支援教育の充実を図る取り組みについて「できた」「だいたいできた」の割合を90%以上にする。	・支援を要する児童の個別の指導計画を作成し、それを素に共通理解を図り、支援活動を行う。 ・佐賀県スクールカウンセラーによる授業実践及び職員研修の開催、また学校生活支援事業における巡回相談員を招聘しての研修会を計画する。	A	・特別支援学級在籍児、通級指導教室利用児、診断名を有する児について、個別の支援・指導計画を作成した。 ・学校生活支援事業における専門家を招聘して職員研修会を実施した。 ・必要に応じて、保護者面談、児童観察、保護者・職員への情報提供を行った。また、支援会議、ケース会議を開いた。 ・全職員が特別支援教育の充実を図る取り組みを行った。	・個別の支援・指導計画を確実に次年度へ引き継ぎ、切れ目のない支援に生かす。 ・保護者の相談など回数が増えてきている。コーディネーターを中心に、対応する学年の分担を行うなど、特別支援教育に関わる職員の役割分担を明確化した上で情報の共有化のよりよい方策を考える必要がある。
	○教職員の資質向上	・授業技術向上 ・UDの視点での環境整備を行う。	・お互いの資質向上のため、1年間に1回以上公開授業を行う職員を100%にする。 ・全学級においてUD教育の視点での教室環境を整える。	・研究授業を学期に1回以上実施し、授業研究会を行うことで授業力アップにつなげる。 ・UD教育の研修会を開催し、授業内容や教室環境を整える。	A	・全職員が、校内研究のテーマにそった研究授業を公開することができた。また、全ての授業で研究会を行ったことで、授業力アップにつなげることができた。 ・UDでは、模範的な教師の事例を紹介したり、個人のおすすめのUD実践をA4版1枚のレポートで紹介し合ったりしたので、教職員全体の意識も高まった。	・教室前面のスッキリ化だけでなく、UDの視点で全職員が共通の意識に立って取り組むものを増やしていく。 ・UDの視点を取り入れた授業に積極的に取り組む。さらに、その具体的な視点の追究を研究の内容に盛り込む。

⑤共に育てる

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	○地域との連携	・地域連携活動の推進	・地域と連携した活動「麓ふれあい祭り」の満足度の割合を90%以上にする。	・地域との連携を深め、「麓ふれあい祭り」の内容を検討し、より充実感を味わえる企画とする。	A	・児童への学校評価アンケートにおいて「地域の方々に教えてもらう学習を楽しめたか」の問いに「楽しめた、だいたい楽しめた」と答えた児童は94.5%だったことから「麓ふれあい祭り」の満足度は目標を達成できたと言える。 ・99.6%の保護者が麓ふれあい祭り等の体験活動は麓小のよいところだと答えていることから、次年度も継続して、地域と連携しながら取り組んでいくべきである。	・高い評価で喜ばしいが、PTA本部組織や学校職員が変わってもいかにスムーズに接続、継続させていくかが大切。開かれた学校推進委員会が核となっているシステムを1学期のうちに学校職員がしっかり共通理解して2学期の「麓ふれあい祭り」に向かうことが重要である。
	○小中一貫教育の推進	・鳥栖西スタイル「三訓」「あいさつ」「時間」「清掃」を大切にされた指導の充実 ・小中学校職員の相互理解	・研究企画委員会・拡大協議会を月一回以上実施する。 ・3校合同研究会を年2回以上行う。	・4月当初に、年間計画を立て、会議や打ち合わせを入れておく。 ・拡大協議会での決定内容については副部長を中心にして各学校で実践していく。 ・8月4日三校合同教職員研修会、11月の三校合同授業参観による研修会を実施する。	A	・8月にユニバーサルデザイン、12月に教科「日本語」についての三校合同教職員研修会を実施した。部会ごとの情報交換もでき大変有意義だった。 ・麓っ子ががんばり週間の取り組みを通して学習規律や生活規律の定着につながった。 ・中学校の体験授業や部活動見学も充実していた。 ・教科「日本語」では、ゲストティーチャーによって日本の言語や文化などに深く触れることができたが、ゲストティーチャーとの連絡や日程調整が難しい。	・いろいろな取り組みが形骸化しないようにする必要がある。児童に取り組む意味を理解させ、意識を持たせ、実践へとつなげていくための手立てを工夫していかなければならない。 ・来年度は、研究発表会を控えている。年間の計画をしっかりと立て、早め早めに取り組むと共に、職員との共通理解のための通信を発行していく。

4 本年度のまとめ・次年度の取組

○学力の向上については、学力向上対策コーディネーターと研究主任を中心として学習規律、学習習慣の定着を目指してきた。麓っ子ががんばり週間において、生活反省や家庭学習時間の振り返りをデータ化し、学年の実態把握に努め、また、児童一人一人の変容を児童自身に知らせることで、意識の高揚を図ることができた。次年度も継続して取り組んでいく。
○いじめ・いのちを考える日の取り組みに限らず、日常のつぶやきやいじめについて児童アンケートを実施して実態把握に努めたり、定期的な保護者へのアンケートも実施したりして、学校・児童・保護者が一体となって「いじめを許さない」機運を高めてきた。人権集会や全校集会での取り組みを充実させあたたかい心情を育て、全職員一丸で絶対いじめ事例が発生しないように努めている。
○小中一貫教育の研究については、平成30年度の研究発表会に向けて、UDの考え方を取り入れた指導方法、教科「日本語」の指導等を共通理解しながら日々実践してきた。鳥栖西中校区3校での連携を深め、これからも成果を共有しながら研究を進めていかなければならない。国語科においては、「対話」をキーワードにした授業実践を積み重ねてきた。どの教科においても指導のポイントとしてとらえ継続していく必要がある。
○地域連携活動の推進に関しては、ほとんどの保護者が「麓小のよいところ」とであるとアンケートで答えている。本校の特色でもあるので、「開かれた学校推進委員会」と連携し、取り組みを深化させたい。

●は共通評価項目のうち必須項目、◎は共通評価項目のうち特定課題、○は独自評価項目